

共同研究 ● 物質性的人类学（物性・感性・存在論を焦点として）（2011-2014）



出雲大社の西にある稲佐の浜（旧暦 10 月の神在月に神迎祭が催される）の弁天島（2014 年、古谷嘉章撮影）。

### 素材と形のマトリクス

伊勢神宮の式年遷宮では、物質の経年変化に抗して、同種の素材を用いて同じ形を再現することで、特定の形のモノが長年にわたって存在しつづけることを可能にしている。新たに作り直すことで、言わばエッジを際立たせて、「形なし」になることを防ぐという発想である。

出雲大社は 60 年ぶりの「平成の大遷宮」の最中で、2013 年に本殿の修造が完成した。こちらは 1744 年に建替えた本殿の檜皮葺きの大屋根の葺替えなど、大規模な修理が施されている。現在の本殿は高さ約 24 メートルだが、社伝によれば古代には 96 メートル、中古にも 48 メートルあったとされ、2000 年に境内から出土した杉丸太 3 本を束ねた巨大柱根は、伝承が絵空事ではなかったことに「物証」を与えた。何度も倒壊したという記録もあるが、倒れることを想定してもなお、常識はずれに高い形のモノを建造しつづける意図があったのかもしれない。建築基準法はまだなかった時代である。

物質性というテーマに縁のありそうな大物主神の別名もつ大國主神を祭る出雲大社に隣接する、島根県立古代出雲歴史博物館で開催した研究会（2014.3.2）で、同館の柳浦俊一の「呪術具の素材からみた縄文時代の価値観」と題する報告をめぐる議論を通して、モノの製作に際しての「素材と形のマトリクス」とでもいうべきものが浮かび上がってきた。

素材は特定の性質と特定の形をもつ。製作されたモノも特定の性質と特定の形をもつ。あるモノを製作するのに何を素材とし、そのモノがどのような形をもつのかは、恣意的ではない。「これはこの素材で作る」「素材が何であれ、この形を作る」。そこに働いている論理は何なのか。イノシシの犬歯を

素材として、その形を活かしてモノを作る。鹿角を素材としつつも、元の形は無視して別の形のモノを作る、等々。製作者がこだわっているのは何なのか。物質の流れのなかで、特定の素材を用いて特定の形をもつモノが生み出され、つかのま存在し、やがて別のモノ、別の物質へと変じてゆく。

### 着かず離れずの仮面と顔面

仮面というモノは、人間の身体それも顔面の上に被せられつづけることで仮面たりえている。しかしそれが仮面であるためには身体に癒着せずに分離されつづけなければならない。佐々木重洋（名古屋大学）の「『物質性』から再照射される仮面論」と吉田ゆか子（国立民族学博物館）の「仮面の物性：バリ島の事例から」という仮面についての 2 報告（2013.9.21）では、アフリカのクロス・リヴァー地方の仮面結社と奥三河の花祭りの鬼、そしてバリ島の仮面舞踊の事例を通して、さまざまな論点が浮かび上がってきた。①仮面が着脱可能なモノであるがゆえに、「演者の身体から分離しているとき」と「演者の身体と協働しているとき」という異質な状態を往還しつづけること。②表情をもつ生きた物質たる顔面を写して、まったく別の素材を用いた仮面として形作り、さらにそれを顔面に装着することが織り成す、顔面と仮面の相互参照のプロセス。③仮面が素材から生み出され、使用されるなかで経験を積み、成長（成熟）あるいは衰弱していく「生涯」において、人間の手で物質化された仮面は、もはや人間が完全には統御できないものになってゆく。

### 血液という流れる物質

私たちは、物質について論ずるとき、固体を中心に据えがちである。確固たる形が安定して存続すると考えられているからだろう。他方、器によって形を変え、どこまでが一体な



オバシンジヨム（「呪薬の神」）の仮面を被ったの託宣（1996 年、カメルーン、エジャガム社会、佐々木重洋撮影）。

のか不明で、流れて留まらない液体は、ぬるぬる・サラサラと捕らえどころがない。

血という物質あるいは「血」ということばを前にして、心穏やかでいるのは難しい。それはたいてい過剰な意味を帯びている。人類学も血のシンボリズムや比喩に関心を寄せてきたが、そこでは、誰にとっても自明な血という同じ物質があって、それに付与される意味が社会によって異なると考えがちだった。しかし血液は、いつでもどこでも「肺で酸素の補給を受け、心臓から動脈を通して出て行って全身をめぐる酸素を供給し、静脈を通して心臓に戻ってくる物質」だったわけではない。いまでは周知の血液循環についても、1628年にウィリアム・ハーヴィーが証明した後でさえ、毛細血管が発見されるまでは、疑念は払拭されなかった。物質性的人类学としては、血液という物質についての（近代科学的）自明性を取り払ってみたい。身体の中にある、流れたり固まったりする、生死に関わるらしいあの物質は何であると人々は考えたのか、考えているのか。

そこで *Journal of the Royal Anthropological Institute* の血をテーマとする特集号 (Carsten (ed.) 2013) を手掛かりに、水など液体一般も視野に入れて、「血・血液の物質性」について議論した (2013.6.15)。論集のトピックはあちこちに流動し、照準するレベルも、物質、象徴、比喩の間を揺れ動く。十字架にかけられたキリスト（像）が流す血や聖体拝領で摂取されるキリストの血。瀉血や輸血など、体の外に出したり中に取り込まれたりする血。人を形作る素材としての血。血縁や輸血のように人々を結合する血、あるいは人種や血液型のように分離する血。真実の証人としての血。絵画や塑像から食品にいたるまで、モノを製作する材料としての血。

議論で得られた教訓を2つだけ記す。ひとつは、血液は流れることを常態とする物質であり、動くものとして捉えなければ捉えそこなうこと。いまひとつは、「呪文を唱えるなど一定の手続きを経て血が別物になる」と人々が言うとき、意味づけの変化にとどまらず、「別の物質になる」ことを真摯に受け止めるべきこと。水にしても、固体でも液体でも気体でも同じ物質すなわち  $H_2O$  であることは、湯気と氷がまったく別の物質であるという認識を無効にはしない。

### 火が物質におよぼす変化

火は、さまざまな物質にラディカルな変化をもたらす強力なエイジェントである。その作用は、暖める（温める）、炙る（焙る）、焼く（燃やす）など一様ではなく、生じる変化も物理的あるいは化学的など多様である。焚火で暖まると、火刑に処せられるのは、まるで違う体験である。

このテーマに関わる論点をミニ報告によって「あぶりだす」ことを試みた研究会 (2013.12.8) の議論は、いくつかの対象に収斂した。火葬や火刑（焚刑）、火を使ったモノ作り（冶金や土器作りや錬金術など）、（食人も含めた）火を使った調理、火災（による焼失）、等々である。

それぞれの事例で、火による介在の前後で、「変化するもの」と「変化しないもの」がある。逆説的にも、そこでは、火災で焼けなかった聖遺物だとか、焼け残りのモノが帯びている臨場感だとか、遺体を焼き尽くした後に残る霊魂だとか、燃焼によって解き放たれて不可視の気体として上昇する何かだとか、火によって媒介されて析出する「物質の+ $\alpha$ 」（あるいは

は+ $\alpha$ の物質）のごときものが浮かび上がってきた。

火で燃やすことは、「バリ人のモノ観とヒト観」と題した鏡味治也（金沢大学）の報告（2013.9.22）の主題でもあった。バリでは生後105日目の儀式で人間の体内に導入される先祖の霊が、遺体の土葬そして遺骨の火葬の後、さらに入念な浄化儀礼を経て天界に戻り、やがては子孫に再生する。特に興味深いのは、遺灰として（物質のスーパーストックともいえる）海に流された後に、再び依代に付着させて燃やして浄化し、その灰を海に流し、霊だけを呼び戻して山の寺院に導くという、偏執的ともいえる非物質化であり、そのために繰り返し（触媒を介在させて）物質化するという逆説である。そこでは、 $(A + \alpha) - A = \alpha$  という、言わば、見えない物質  $\alpha$  を操作可能にする引き算の公式が働いている。



村の墓地で、埋葬してあった骨を掘り出して火葬に付す（2003年、バリ島、鏡味治也撮影）。

### 物質の流れのなかで

人間は物質世界のなかに住んでいる。所与の物質として存在するものもあれば、物質を素材として人間がモノとしての形を与えたものもある。そのように物質化されることで、人間が物質的に働きかけることが可能になる一方で、物質化されてしまったがゆえに巻き込まれる「しがらみ」もある。

アイザック・アシモフのSF『神々自身』（1986）の「パラ宇宙」では、私たちの宇宙とはまったく別の驚くべき物理法則が支配している。しかし驚くために「パラ宇宙」にまで出向く必要はない。私たちの物質世界も、思った以上に意外性に満ちている。

### 【参考文献】

Carsten, Janet (ed.) 2013. Special Issue: Blood will out: essays on liquid transfers and flows. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 19 (Issue Supplement): S1.

アイザック、アシモフ 1986『神々自身』小尾芙佐訳 早川書房。

### ふるや よしあき

九州大学大学院比較社会文化研究院教授。専門は文化人類学。ブラジル・アマゾンを主なフィールドとして、憑依、土器、芸術、モダニズムなどについて考えてきた。著書に『異種混淆の近代と人類学』（人文書院2001年）、『憑依と語り』（九州大学出版会2003年）など。共訳書に、J. クリフォード『文化の窮状』（人文書院2003年）など。